

昭和十八年の学徒出陣より
六十年の年に当たって

栃木県 鈴木 宏

序

運。人のさだめ。

人の世の、うつり変わりを

思いつくままに、……。

鈴木 宏

はるかなる いにしえから

人の世は うつり変わり、

その姿を かえてきた……。

その流れの中で、人々は、

喜び、苦しみ、悲しみ、悩みながら、

この世から 去っていった。

つかの間の人生……そして運。

それは、うたかたの如く

この世に泡立ち、流れ、

運に従って「空」^{くう}になった。

我今、八十歳をむかえんとす。

今までに知り得し事どもを

思いつくまま、残しおかんと

つたない 筆をとる。

平成十五年八月一日

平成不況の今の世を見つめて。あせらないで、先を見て、対応してゆかねばならぬ。新しい時代への大波……時の流れの底で思う事。……人には、運命。がある。……

栄華を誇ったビル街が……車が……住居が、

放置され、よごれ、こわされてゆく。

そして街は空洞化し 廃虚となり消えてゆく

もの悲しいエレジーを奏でている廃虚。

これは、幻想のタイムトラベルなのか

跡形もなく、消え去ってゆく人。……物。

世界だけが残り、時間だけが続いてゆく。

私は「今」と「永遠」の間を歩んでいるのだ。

この世の人の一生は、有限で、短いもの。

神の定めるいつの日かに……私も、

すべてを残して、旅立ってゆく筈だ。

それは、誰にでもくる「死」である。

やれるだけやってきたと、思いつつ……その記

憶は残しておけるようにこれを書く。

時代の流れは、止める事ができないもの。

世は動いている。そして時代は変わってゆく。

◎ 昔の思い出。

学徒出陣より満六十年の年をむかえて、

昭和十八年の学徒出陣者。

私が生まれたのは、一九二三年、大正十二（一

九二三）年です（東京の大震災の年）。

動員学生の一人として、昭和十八年十月二十一

日の雨の中の動員学徒大壮行会にも参加して、十一月一日、宇都宮第四十部隊へ入営したのでした（砲兵隊）。

私は明治大学政経学科の学生でしたので、明治大学総長より、「日の丸の旗」を贈られました（今でも自宅に現存しております）。そして学生は約九カ月間の猛烈な教育の後、戦局に対応して、中には、特攻隊員ともなって、出撃し、戦死して行ったのでした。これは運でした。

彼らは、一人一人の、かけがえない生命にかけて、課せられた役割に、最後まで最善を尽そうとしたのですが、その誠実さがむくわれる事なく、昭和二十年八月十五日、遂に、終戦（敗戦）となってしまうのでした……。これも「運命」なのでしょう。終戦後になっても、満州・朝鮮で、ソ連軍に抑留された人達は、何年もの間、ソ連のきびしい寒さの中で、望郷の思いに、無念!! の思いにさらされながら、死んでゆきました。その

数だけでも約七万人。この戦争で死んで行った日本軍人は、三百万人以上、とも言われておりますが、幸いにも私は、神の定める、「運命」によって、ソ連での抑留生活の二年半を体験しましたが、無事、生き残って、日本へ帰って来ることが出来ました。……「運命」。

考えてみれば、終戦から二カ月後になって、日本へ帰すと言ってシベリアの抑留。厳寒中の、二十五日間ものスキ間だらけの貨車でシベリア横断、その後の四日間もの「雪中行軍」、ラーゲリ生活、原木運搬作業、病気・隣りの戦友のチフスでの死亡、マラリアでの入院、ラボート、そして実現した待ちに待った日本への帰還、よくこんな大きな試練に耐え抜いて、帰国できたものです。昭和二十二年十一月三十日、夜、宇都宮へ帰りつきました。空襲で焼け、仮小屋のような家の並ぶ宇都宮市内。「ローソク停電」とか言う、暗い町を通って、二荒山神社前に来ました。そして、

鳥居の前で深々と頭を下げる。……今、戻って参りました。よくぞ私を守って下さいました。本当に、本当に、有難うございましたと心より、お礼をつぶやきました。……。両眼から、涙がしたたれていました。

「運命」は、私を、生き残らせて、宇都宮へ、帰してくれたのでした……。

学徒出陣での強制入隊、過酷な軍隊教育。そして、ニューギニア・ウエワークへの赴任命令、留守部隊のある朝鮮への渡航、司令部勤務、暗号班長、終戦。ソ連軍への抑留、十二月の厳寒中の貨車でのシベリア輸送。その上、四日間もの雪中行軍。凍傷患者の付きそい。酷寒中での重労働。……骨と皮ばかりになった死体置場。……私の体重は三十八キロ。肺結核患者の死亡者。腸チフスでの死亡者。マラリアの発病、左耳の中耳炎、療養班入り。そして待望のダモイ（帰国）……。

◎ さすらい人

一、ウラル路の 秋の夜空に

降るがごと 輝く星を

仰ぎては しみて思ゆる さすらいの

遊子の心 君知るや

二、悲しみは 之こそ 忘れぬ

ありし日の 幸はついはず

うたかたの 消ゆるが 如くうつりゆく

世々の姿ぞ なげかるる

三、追憶の 夢はうつくし

その夢も むなしくなりて

立ちつくす 夜は冷えゆく星かげに

ぬれても泣かん 思いあり

四、かなしみの ついのきわみは

ひとすじの 望みし あれば

星さゆる 久遠の光 したいつつ

若き 命を 生きんかな

◎ 雨中の ヤポンスキー（日本人）

今日も雨 三寺十塔 雨にけぶりて

五濁の長雨は 青揚の葉末をたたく。

郷愁 雨。

馬鈴しよの カゴを背負いし

ヤポンスキーは

ジット 道ゆく人を みつめている。

◎ 口々の、グチにタル負い 時雨 闇。

終戦。……戦争が終り、二カ月もたつて、内地へ帰す、と言っておきながら、船に乗せてソ連へ抑留したソ連です。「だまされた」抑留でした。そして大勢の人々が、病氣・望郷の思いで「お母さん!!」と言いながら、亡くなっていきました。無残!!……。もしかしたら私も、この北緯六十度近くのロシアの地に埋葬されていたかも知れないソ連抑留でした。「運命」「神・仏」は私に、「生

き残れ!!」と命じ、多くの亡くなられた人々の死の意味と無念さを、書き残させているのかも知れません。それが「私の運命・つとめ」？ そのためにこれを書いているのでしょうか。

そして、昭和二十一〜二年より、多数の戦争を全く知らない「戦後の世代」が生まれてきました。知らない……「神」に近い気持ちで、国のため、故郷のために、死んで行った人々の事を……忘れないで下さい。戦後の思い出として、これを記します。

あと書き

「だまされて抑留された」私のソ連邦での抑留生活。無惨にも、私の青春は、ツボミも持たずに、戦争の歯車にまきこまれて、散ってしまったのでした。ただ幸いに「生き残れた」だけでしたが、別の意味では、私も「戦争の犠牲者」だった訳です。

同じ収容所で隣り同士で、同じ水を飲み、同じ食事、同じ仕事をしていた学徒出身の渡辺君が腸チフスになり、この渡辺君を看病していて、同じコップの水を飲んでいた私が、生き残ったのです（渡辺君は死亡）。又、肺結核にかかり、私が看病の役目でみとっていた若い学徒出身の少尉の、「おかあさん……」と、はるかな故郷の母を慕いつつ亡くなったときの声……、その無念さ……、もしかしたら、私もこの人達と同じく、北緯六十度近いロシアの地に埋葬されていたかも知れません。「運命」は、私に「生き残れ!!」と命じ、今、多くの亡くなられた人々の死の意味と無念さを、ここに書き留めさせておきます。